2006年　中国ワークキャンプ報告

Friends International Work Camp (FIWC) 九州

2006 年秋　　発行:FIWC 九州

「もう少しお前たちのことを見ていたいんだ、本当の孫みたいだから」

ある夜ミーティングが終わり、洗濯をしたり、ギターを奏でたり、酒を浴びたり、天の川を眺めたり、ものよみにふけったり、日記を書いたり、近くの川へ水浴びに行ったり、村人と時間を共にしたり・・・寝袋に入る前の数時間をキャンパーはおもいおもいに過ごしていた。そんな何気ないキャンプ中のある夜、そろそろ寝ないかとあるキャンパーが促すと、ずっと家の前に座っていたその老婆が言った、「もう少しだけお前たちのことを見ていたいんだよ、お前たちが来て本当に村はにぎやかになった、嬉しいよ、お前たちはみんな私の本当の孫みたいだよ」

今年 3 月にこのジャーピン村に訪れたとき、私は本当にこの村が、ここの村人が好きになった。たった一泊の下見日程の中、思うようにワークのニードが見出せないまま私たちは村を出た。みんな迷っていた。この村で夏にキャンプをするのか。下見後の中国側とのミーティングでも、ジャーピンにはトイレも水道もある、私たちを必要としている村はもっと他にあるのではないか、その空間にいたほとんどのキャンパーがそう思っていた。「じゃ、お前たちはあの村人を、あの子どもたちを見捨てることになるんだぞ。下見に訪れたのなら、そこでキャンプをするのが筋じゃないのか。」あんちゃんのそのひとことで頭にふっとよぎったジャーピンの村人たち。突然訪れた私たちに、一針一針丁寧に縫った手作りの民族衣装を着させてくれた。わざわざバイクで人数分の茶碗とお箸を市場で調達してきてくれ、夕飯をふるまってくれた。恥ずかしがって近寄ってこなかった子どもたちとも、次第に打ちとけあって菜の花畑で遊んだ。足裏の傷を快く見せてくれ、その場しのぎの簡単なケアに「謝謝、謝謝」と手を握ってなかなか離さなかった。ジャーピンでこの夏、キャンプをしたいと思った。私は本当にこの村とここの村人が好きになっていた。

いつも家の前に腰を下ろし、時間が過ぎていくのをただただ待っている 90 歳の老婆。下見に来たときはその光景と、その老婆の表情を目にして、何というか、悲しかったのを覚えている。そうやってもう何十年もこの村で過ごしてきたのだと思うと、言葉にならない思いがこみ上げてきた。でも今は違う。元気にキャンパーとはしゃぎまわる子どもたちを、老婆は本当に嬉しそうな楽しそうなくしゃくしゃの笑顔で見つめている。このワークキャンプがこの老婆の心になにか残すことができたのであれば、私も嬉しい。

そんなキャンプ中、もっともっと村人が好きになった。だから別れは本当に辛かった。いままでいくつか村を訪問してきたが、別れのときに私自身が涙したのも、村人が抱きしめて泣いてくれたのも、ジャーピンが初めてだった。

2006 年夏ジャーピン村ワークキャンプリーダー　渡辺　恵利

目次

Ⅰ　はじめに

1、 FIWC について（FIWC 九州について）　P3

2、ハンセン病、中国におけるワークキャンプについて　P3～4

Ⅱ　ジャーピン村ワークキャンプ

1、下見からの軌跡　P5～7

2、キャンパー紹介　P8～9

3、スケジュール　P10

4、ワーク内容　P11

5、日々想う・・（今日のワーク・教育・ケア・ひとこと）　P12～19

6、個人総括　P20～24

7、総括　P25

8、会計報告　P26

9、連絡先　P26

Ⅰ　はじめに

１、FIWC（Friends International Work Camps）について

FIWC（フレンズ国際ワークキャンプ）の起源は、1919 年、第１次世界大戦直後のオランダに遡る。この年、オランダでは国際友和会の会議が開かれ、「以前の敵との和解は、いかなる物質的利益をも考慮に入れない、奉仕の精神のみに基づく、一般的な仕事（ワーク）によって促進される」という決議がなされた。この会議に参加していた、スイス人のクエーカー教徒ピエール・セルゾールは、これを具体化するものとして国際ワークキャンプを提案したのだった。そして翌 1920 年、第一次世界大戦でフランスとドイツの激戦地となったウェルドンという村に出かけて行って、戦争で破壊された村の復興を呼びかけた。その結果、かつて敵同士であったフランス、ドイツ、スイス、イギリス、ポーランド、オランダ、ハンガリーなどより若者たちが参加して、十数人でキャンプが行われることになった。これをきっかけにしてピエール・セルゾールは、戦争で破壊された場所にいってはキャンプを呼びかけ、その運動の輪は次第に広がっていった。これが、世界最初のワークキャンプだったのである。 日本にこのワークキャンプの運動が伝わったのは、第２次世界大戦後の 1945 年に、アメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）が「広島の家」建設キャンプを行った時。AFSC は、引揚者の住宅整備など、戦後復興のための様々な活動を行った。そして、日本キリスト教会協議会青年部会によってワークキャンプの活動が採用され、その下で学生を中心とした日本ワークキャンプ委員会が組織され、運動が全国に波及していったのである。

現在の FIWC は、この運動を受け継ぐもので、1950 年代より日本国内外で様々な活動を展開している。現在では、関東、関西、広島、九州に各委員会（＝支部）があり、それぞれ情報交換をしつつ自律的な活動を行っている。

FIWC 九州は、2004 年 4 月に、それまで関東、関西、広島の各委員会で活動していたメンバーたちが、たまたま九州に流れ着いたことから立ち上げられた新しい団体で、2005 年春、FIWC 九州初のキャンプがフィリピンレイテ島において行われた。現在では、フィリピンはもちろんのこと、中国、そして国内での活動を展開している。フィリピンでは water system、中国においてはハンセン病をテーマにワークキャンプを実施、また、フリーマーケット開催による資金集め・農業体験・他団体との情報交換・ニュースレター発行など、国内活動にも力を入れている。

２、ハンセン病、中国におけるワークキャンプについて

ハンセン病は細菌による感染症のひとつである。ハンセン病を引き起こす「らい菌」は、人間の体内に入ると末梢神経で増加、治療が遅れると手足の運動麻痺や知覚麻痺、温度覚や痛覚の麻痺を引き起こす。この知覚麻痺のためやけどや外傷、またそれによる骨髄炎などにより、手足が短くなったり、顔の変形がおきたりする。こういったこともあり、ハンセン病は様々な形で差別の対象とされてきたのである。しかし、らい菌は感染力が弱いため、らい菌に感染しても、通常は発病しない。すなわち、栄養失調、極度の疲労やストレス、乳幼児期の感染（宿主の免疫力低下）や狭く不潔な住居、浴場、非衛生的な衣服、寝具、粗末な食事、つまり環境・衛生・経済因子など様々な負の要因が重なった場合にまれに発病するが、状況が改善されれば自然治癒することもある。1980 年以降、世界保健機構（WHO）は、ハンセン病蔓延国に向けたグローバルな対策として、多剤併用療法（MDT）を推奨している。MDT により「らい菌」は数日で死滅し、早期に治療すれば後遺症を全く残さずに完治する。

日本のハンセン病

日本では１930 年ごろから警察力まで動員し、ハンセン病患者たちを強制的に隔離していった。人々の社会的偏見をあおりながら、隔離を正当化する政策がとられたのである。その根拠となったのは「らい予防法」であり、この法律は医学的根拠を失った後も 1996 年まで存続した。らい予防法が廃止された後、国が予防法によって行った強制収容、終身隔離、患者作業、断種など様々な人権侵害に対して

反省と謝罪を求める気運が高まり、「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟が起こされ、原告である元患者側勝訴の判決がなされた。しかし、予防法が廃止され、国の責任が裁判で明らかになった今も、隔離前に暮らしていた故郷に帰って生活している人はほんの微々たる数。未だに療養所で暮らす方が 3000 人以上おり、その平均年齢は約79歳といわれている。ここからも、ハンセン病の問題が日本でいまだ終わっていないことがうかがえる。

中国のハンセン病

中国には 625 にも及ぶ大小さまざまなハンセン病快復村がある。中国では日本の「らい予防法」に該当するような法律があったわけではなかったが、社会におけるハンセン病の理解も乏しく、また中国において有効な治療法がまだ普及していなかった時代、つまり 1980 年ごろまでは、中国のハンセン病政策としては隔離政策がとりうる唯一の政策だった。中国のハンセン病快復村は、南部に集中しており、その中でも広東省が最も多く省内には 67 箇所のハンセン病快復村がある。広東省以外では、江蘇省、山東省、雲南省、四川省に多くの快復村がある。中国で現在治療中のハンセン病患者は 6325 人（2002 年）で、人口一万人当たりの罹患率は1人以下となり、WHO が定めた公衆衛生問題としてのハンセン病は制圧された。しかし、日本同様、中国でもハンセン病に対する差別、偏見は根強く残っており、ハンセン病が治癒した現在も社会復帰ができず、快復村内で暮らすことを余儀なくされている人の数は中国全土で4万人にものぼるといわれている。彼らの生活は地方政府から支給される生活給付金に依存しているが、その額は地方により異なる。地方政府によってはその財政上の問題から、非常に小額の給付金しか支給できないところもある。今現在も 1950 年代から 60 年代に建設された倒壊寸前の家屋で、清潔な水を供給する設備やトイレ、電気すらない環境での生活を余儀なくされている高齢の村人たちが大勢いる。

FIWC ではこういったハンセン病快復村でワークキャンプを行っている。1～3週間村に住み込み、水道の整備、トイレや家屋の建設などの建設プロジェクトを主に行う。FIWC 九州発の中国キャンプは 2005 年夏のピンシャン村から始まった。2006 年春はピンシャン村再訪、ジャーピン村下見、そして今回 2006 年夏のジャーピン村でのキャンプがピンシャンに続く第二回目の大きなキャンプとなった。中国でワークキャンプを実施するにあたり、欠かせないのが現地 NGO の ‘JIA「家」’ である。JIA は中国各地にワークキャンプを根付かせるため、2004 年 8 月に設立され、ワークキャンプコーディネートセンターとして機能している。私たちは現地の大学生が組織するワークキャンプ団体とともに村に赴く。キャンプ中の緊密な協力関係により、キャンパー同士、キャンパーと村人の間には継続的な信頼関係が生まれる。ワークキャンプがもたらすこの人と人とのツナガリが、ハンセン病快復村への偏見・差別の解消につながることを私たちは願っている。

広西省ピンシャン村

壮大な山々が村を囲む

広東省リンホウ村の村長　　キャンパーにお茶とタバコを振舞ってくれる

Ⅱ　ジャーピン村ワークキャンプ

1、下見からの軌跡

●下見

2006 年 3 月 11 日～12 日で甲坪村（ジャーピン村）へ下見に向かう。FIWC 九州とそのカウンターパートである桂林の学生団体、緑光（桂林医学院）、紅日（広西師範大学）、そして JIA が実施。桂林からかなり離れたところに位置するジャーピン村。到着すると一番初めに迎えてくれたのがあるおじいさん。左足を切断していた。村へ入っていくと無邪気な子どもたちの姿があった。

≪基本情報≫

村名・創立	广西河池市金城江市南丹県八圩甲坪村（創立 1956 年）
交通手段	広州～桂林　（バス 12h） 桂林～金城江 （汽車 6h） 金城江～八圩（バス 1.5h） 八圩～甲坪村（車 0.5h）
気温	夏季 25～32℃ 冬季－2～10℃
産業	とうもろこし栽培、豚・牛・鶏などの畜産業、養蚕 ※副業として刺繍など
村人	・後遺症を有するハンセン病快復者　　7人（男3：女4） 　※うち2人は傷が深刻で他者によるケアが必要。残り5人は自身である程度ケアが可能。 ・ハンセン病快復者　　11人（男4：女7） ・患者や快復者の家族や親戚　　27人（うち15歳以下の子ども16人） －－以上計45人－－
状況	3分の1ほどの家がコンクリート造りで新しく建て直されており、それぞれの部屋にベッドも設置。トイレ4つと水道3つも共同用に新しい家の前に設置されている。すべて最近設置された様子。これらに関わった支援団体は今のところ不明。 残りの3分の2の家は古いままでトイレ・水道ともに無し。共同用を利用している。3つの地区に分かれており、中心に位置する地区が最も広く、ほとんどの村人が生活する。政府からの生活保護はひとりひと月あたり米15キロ、豚の脂身39キロ、塩。
問題点	・偏見（周辺の農村で根強い） ・医療ケアの向上（政府による薬の普及など十分でない） ・水道の不足（共同用に3本のみ）、排水の状況（水の流れが滞っており不衛生） ・子どもについて（教育、衛生など） ・特産品（養蚕、伝統工芸などの発展） ・牛舎や家畜小屋の改築

	・新居の台所に煙突がなく換気ができない ・共同体としての団結不足

●下見後ミーティング

ミーティングの結果、2006 年夏のキャンプサイトはジャーピン村に決定。以下決定事項。

・中国、日本、ドイツの3ヶ国合同でワークキャンプを行う。（人数比　中：日：独＝7～10：7：3）

・各国の連絡係を軸に連絡を取り合い具体的なワーク計画を進める。

＊挙げられたワーク例＊

－排水溝づくり

－地面を平らに（大小さまざまな大きさの石が多い）

－新家屋の台所に煙突を設置

－牛舎・豚舎の改築

－医療ケア

－子ども達への教育（歌、踊り、保健衛生指導など）

－衣服、ブランケットを集め、村人へプレゼント

・新しい家や水道などを作った団体、政府に連絡をとり今後の展望など確認しあう。（→JIA が担当）

・医療ケアの計画（カルテ準備、薬の手配など）

村の様子

古い家屋

村人

子どもたち

●帰国後キャンプ開始までの準備

・日本側として

キャンパー集め（チラシ、HPで呼びかける）	3 名が新キャンパーとして名乗りを挙げ、計４名のキャンパー確定！ ミーティングを重ねる
資金集め（フリマ）	不足。前回までの貯金でまかなうことに
衣服、文房具、おもちゃ等集め （FI 九州内、各キャンパーの呼びかけ）	子供用、大人用の衣服、石鹸、リコーダー、ぬいぐるみ等が集まる 選別し、日本で売れるものは日本でのフリマの売り物とする

・全体として

ワーク内容決定 １、 地区 B にトイレを建設（3つの地区を A,B,C とする。現在トイレがあるのは地区 A） ２、 防水壁の建設(新家屋まわりに) ３、 台所（新家屋）の整備 ４、 現在ある水道の排水システム整備 ５、 地面の整備 ６、 医療ケア ７、 教育	１、 地区 B の村人が地区 A のトイレまで行くのは遠すぎるため ２、 雨が降ると新家屋に水が流れ込むため ３、 新家屋に住む村人（高齢）から、台所が高すぎるとの意見あり。かまど周囲の地面を底上げする ４、 排水がうまくいっておらず、水が水道周囲に溜まっておりハエがたかったり異臭を放ったりしているため、地面を掘って水が流れるように排水溝をつくる ５、 小さな石や鋭利な岩があり、特に子どもや高齢の村人に危険であるため、それらを取り除き平らにする ６、 7 名の村人のケアが必要だと判断 ７、 学校に行っていない子どもが多い、衛生面の指導を行う必要がある、の理由から

予算決定（詳細省略）	・ワーク費　　1341，5RMB ・医療ケア費　633，5RMB ・キャンプを開始するに当たってキャンパーが日常生活に必要なもの（食器、鍋、電球など）　　5456RMB 計　7431RMB　（生活費などは含めない）

飛行機へと向かう。いのっち、よろこびのダンス！

そしていよいよ 8 月 8 日、出発の日を迎える！

2、キャンパー紹介

Chinese campers

徐少林（shaolin）: general leader 今回初リーダーを務める。とにかくデカイ男。かなり顔を近づけて会話をするアツい男でもある。サングラスをかけて1人でプリクラを撮るナルシストな一面も・・・!?笑
李荣辉（ronghui）: education leader ピンシャン村ワークキャンプからのお付き合い。ただの筋肉・スケベなキャンパーだった 1 年前とはうってかわって今回は見事に李老师(先生)として子どもたちの前にたつ。惚れ直したよっ！
蒋建国（jianguo）: work leader キャンプ初日から悪酔いして寝吐きし、みんなに迷惑かけたおちゃらけ者。しかし project team の一員としてこのキャンプをコーディネートしてきた頼りがいのあるキャンパーだったりもする（？）。
温闻（wenwen）: record 言わずと知れた名キャンパー！みんなをひきつけて離さないエンターテイナー。彼のさりげない優しさ、真剣な表情、上腕二等筋に胸キュンした女の子（男も!?）は数知れず・・・
谢明明（mingming）: guitar 彼のキラキラした目とスマイル☺は絶品。マイギターを持参し、ジャーピン村をにぎやかにしてくれた。ちんさんとのキャンプラブやいかに・・・!?
林福章（たこ）: life leader

村人の方言を理解できる数少ないキャンパーのひとりとして村人との会話をいつも通訳してくれた。日本語もちょっぴり話すことができる。あだ名はたこ。たこ。
黄俊（jun）: accountant 読書家。暇あらば、物読みにふける。村人にプレゼントする本までも読みあさっていた。ミーティング中にも・・・笑　ひょろながいハンサムボーイ！
周大杰（daxie）：honest camper 素直、優しい、単純。女と同じ部屋で寝るのはこのキャンプが初めてだったから緊張した、と最終日に暴露したかわいいヤツ。これからのワークキャンプを担う期待の新星！
陈林资（ちんさん）: recreation leader 才色兼備。日本語を専攻。ちんさんワールドにハマってしまうと抜け出すことができない。彼女が発した名言たちは私たちの心にいつまでも響き続ける笑。
黄坚丽（小鬼　xiaogui）: KP 口から生まれてきたのかと疑いたくなるほどのおしゃべり。彼女かんかん声はいつも村中に響き渡っていた。おいしいご飯の炊き方を発見してくれた料理上手のキッチンリーダー！
崔娟（cuijuan）: accountant アネゴ的存在。汗臭い男たちに混じって紅一点でワークをしていた。やりくり上手な彼女がこのキャンプのお財布を守ってくれました。
曾丽娟（jennifer）:care leader

ケアリーダーとして最も村人の近くにいたキャンパーのひとり。周りに気を配ることができる素敵な女性・・・と思いきや、泣いたり笑ったり感情を素直に表現するかわいい女の子の一面も併せ持つ。ピンクのキャミソールがお似合い！

以上のキャンパーはみな

・緑光（桂林医学院）

・紅日（広西師範大学）

・ShareLove（桂林工学院）

のいずれかのワークキャンプ団体に属している。

民族衣装（女性用）を着たたこ。キモいロンフォイ。そして、かわいい罗明。

Japanese campers

井上祐介（いのっち）: education, recreation leader

FIWC だけでなく様々なことに挑戦、常に前を見据える頼もしい男。しかし彼の皮膚はちょっぴり繊細で、中国の病院を日本代表として体験してくれた。彼とちんさんとの会話は見もの！

渕上愛（あいちゅわーん）: KP

今回最年少キャンパー。ちっこい体にたっぷりのエネルギーと好奇心を秘めて動き回る。どこにいても人気者のあいちゃん、10 歳程年下の村の子どもたちにもおちょくられていた感は否めない笑・・・初中国、初海外、初飛行機。

宮園香織（かおり）: work leader, accountant

中国語を勉強中の中国大好き人間。優しく楽しくおもしろい。トイレの壁作りの際、隙間をセメントで埋める「隙間埋め職人」に命名される。来春から上海に留学予定！そういえば、美人キャンパー№.1の称号もゲット、あしからず。

渡辺恵利（えり）: general, care leader

日本でも中国でも世界共通な人気者。英語がぺらぺらで、何でもこなす頼れるお姉さん的存在である。腕の T シャツ焼けと虫刺されは誰にも負けない！虫とおじさんに好かれてばかりの 20 歳。

原田僚太郎（たいらん）: record

JIA を 2004 年 8 月に創立。現在代表を務める。凝り性で、美味しい酒のために美味しいつまみを作ることに余念がない。今回はダイエットのため、ワークに精力的に取り組む・・・成果はいかほど！？過去にリンホウ村に一年半住み込んだ。

小牧義美（あんちゃん、xiaomubo）: care, 総監督

たいらんと同じく、FI 九州発の中国キャンプに参加するのはこれで二度目。キャンパーは彼から医療ケアの手ほどきを受けた。今回のキャンプでは本当によく寝ていた。そんなあんちゃんの周りにはいつも無数のハエが添い寝をしていた笑。76 歳。自身も過去にハンセン病を患う。現在は社会復帰し JIA の一員として海を渡り中国で活躍。

白根大輔（だいすけ）: record

たいらんの大学時代の友人。現在ドイツに留学中。ドイツでのキ

大・中・小（あいちゃん、兄弟）

Jennifer、らんさん、おばあちゃん、大輔

あんちゃん、xiaogui、いまにも xiaogui のだみ声が聞こえそう・・

３、スケジュール

8 月 8 日　16:25　福岡空港発（中国南方航空 CZ334 便）
18:40　広州空港着
深夜、桂林へ移動

8 月 9 日　早朝桂林着、桂林のキャンパーたちと合流、
桂林医学院にて全体ミーティング
夜はちんさん家にみんなで雑魚寝

8 月 10 日　4 時起き、桂林北駅発、金城江へ向かう
金城江で先発組（Wenwen, Dajie, Mingming. Jianguo）と合流
車に乗り込み、ジャーピンへ向かう
夕方、村に到着
夜ミーティングの予定が飲みすぎてできず・・

8 月 11 日　workcamp 開始
朝、全体ミート、リーダーミートを行い、ワーク開始

～20 日　15 日 Freeday、夜はパーティー
19 日夜第二回目パーティー
20 日 Freeday、夜最終ミーティング

8 月 21 日　早朝 campout
大輔ドイツへ帰る
桂林泊

8 月 22 日　桂林観光、夜いのっちとあいちゃんは広州へ
その他は 25、26 日の JIA Network 会議のため、桂林郊外の灵川へ向かう、灵川ホテル滞在

8 月 23 日　いの、あいちゃん帰国　広州空港→福岡空港（CZ334、15:30 着）
キャンパーは会議準備

8 月 24 日　香織、えり、あんちゃん桂林観光
会議出席者が続々と灵川に集まる

8 月 25 日　The 3rd Global Network Conference of JIA 開催
夜、香織は広州へ

8 月 26 日　香織帰国　広州空港→福岡空港（CZ334、15:30 着）
Conference2 日目、たいらん結婚パーティーで幕を閉じる

8 月 27 日　広州、潮州へ移動、リンホウ村へ向かう

8 月 28 日　リンホウにてたいらん＆ジエシャン結婚式

8 月 29 日　リンホウ滞在

8 月 30 日　昼リンホウ発、広州へもどる

8 月 31 日　えり帰国　広州空港→福岡空港（CZ334、15:30 着）

＊村での一日のスケジュール

6:30～7:30	ロンフォイ＆いのっち学校
7:00	起床
7:30	朝食
8:10～12:00	ワーク
12:00～12:30	昼食
12:40～15:20	昼休み
15:30～18:30	ワーク
18:40～19:20	夕食
20:30～22:00	ミーティング

桂林観光　　中国の電車のカオスさにいのっちカルチャーショック

４、ワーク内容

1、　トイレ作り

企画通り地区 B にトイレを建設。

2、　瓦移動→空いたスペースに憩いの場作り

地区 B の中心にある大木の下にセメントを流し、憩いの場をつくる。

3、　排水溝掘り

企画通り地区 A の水道まわり 3 箇所に排水溝を掘る。

4、　衣類整理

キャンパーが持ってきた衣類を始め、文房具や靴などを整理。村人にプレゼントする。

5、　屋根作り

新家屋の天井には四角い穴があり、雨が入ってくるため。

6、　教育

Education leader を中心に毎朝青空学校を開校。習字、お絵かき、折り紙、歌、踊り、保健衛生、ハンセン病についてなど毎朝テーマを変えて実施。

7、　医療ケア

午前のワークの一部として毎朝行う。二人の care leader＋日替わりでキャンパー二人の計四人で実施。

（企画時と若干の変更あり）

今回、教育「6時半～7時半（朝ご飯前まで）」と、ケアは特に力をいれて毎日継続して行った。

他のワークは、8時10分～12時、15時半～18時半というように日差しの強い時間帯を避けて、午前と午後に分けて行った。

学校。みんなパーティーで披露する歌とダンスを練習中

毎日ケアを続けたおばあちゃんと

5、日々想う・・今日のワーク（香織）・教育（いの）・ケア（えり）・ひとこと（みんな）

8 月 10 日　ジャーピン村到着、キャンプイン

＜ひとこと＞

車でデコボコ道を走ること2時間。やっと甲坪村に到着。のんびりとした雰囲気が流れる村。村人達がじっと私達を見つめる。 到着早々夕立が。わけもわからぬまま、見よう見真似でとうもろこしを家に入れる作業を手伝った。初日の夜は、村長さん、トイレ作りの職人さんなどを招いての飲み会だったため、男集はみな接待で酔っ払い、ミーティングさえもまともにできなかった（笑）（香織）

村人（特に高齢のおばあちゃんたち）のほとんどがとうもろこしを栽培

男同士寄り添って寝る dajie, mingming

8 月 11 日　キャンプ 2 日目　ワーク開始

＜ワーク＞

・トイレ

・衣類整理

初日のトイレ作りは、草の生えた空き地を耕すことから始まった。衣類整理は村の人々にあげる服、おもちゃなどを分類し、整理した午前中でほぼ終わったので、昼からはトイレを手伝った。

＜教育＞

キャンプ初日。子供たちはまだ戸惑いの色を隠せない。まず、子供たちに踊りを教えることからはじめる。中国の伝統的な踊りらしいが、この踊りがなかなか難しく、子供たちも苦戦している様子であった。それから、地図で日本や中国を示し、私たちキャンパーがどこからやってきたのかを伝えた。そして、私の名前を「イ・ノ・ウ・エ・ユ・ウ・ス・ケ」と大声で呼んでもらった！嬉しい。

＜ケア＞

村を一周し、下見時に作成した記録をもとにケアが必要な村人を確認する。後遺症を抱えケアが必要なのは 6 人。仕事中に怪我をしケアが必要な村人 2 人。この 8 人を中心に毎日のケアを行う。個々人に合わせて足浴、ハードスキン削り、消毒、ガーゼ交換、包帯、爪きりなどを実施していく。

＜ひとこと＞

初っ！づくしのキャンプ初日。胸がドキドキとは、この日のためにある言葉。ただ、初っ！づくしなだけにいろいろとアタフタすることも多くて。中国は“不注意は許さない（ちんさん語録より抜粋）”国である。ちなみに、夜、ねずみを食らう。とりあえず、これがなんとまあ、うまいこと。これが最もびっくりの初っ！（いの）

8 月 12 日　キャンプ 3 日目

＜ワーク＞

・トイレ

・瓦移動

・排水溝掘り

トイレは、タンクを作るため、穴を掘った。この穴掘りがなかなかきつい！主に男キャンパー達が頑張った。女キャンパーは、憩いの場を作るために、小さな瓦の移動に専念した。排水溝掘りは、軽く溝の跡をつけて、午後からはトイレを手伝った。

トイレ完成までまだまだ先は長い

＜教育＞

まず、踊りを引き続きやる。徐々に子供たちがうまくなっていく。 次に、洗顔を子供たちに教える。それから、日本の「さくら」を大合唱する。なかなかうまく歌えない。そして、大輔を中心に似顔絵教室をおこなう。

＜ケア＞

昨日に引き続き、村人にいつから傷があるのか、どうして傷ができたのか、生活上困ることはないか、など、質問をしながらデータを集める。そうすると村人の貧しい生活の実態が見えてくる。足裏に潰瘍を持っているのに山に薪やとうもろこしを取りに行かなければならない。ケアと教育を結びつけ村人の生活を改善できないかミーティングで話し合う。（子どもに薪拾いを手伝ってもらう、など）

＜ひとこと＞

憩いの場作りのため、そこに大量にあった、瓦をどける作業をした時に、大量の虫、虫、動物…!!悲鳴を上げる私達を見て、村の子供達は面白がり、素手でムカデを捕まえて、私達の方へ…!!村の子供はたくましかった！（あい）

8 月 13 日　キャンプ 4 日目

＜ワーク＞

・トイレ

・瓦移動

今日はトイレ作りの基礎となる土台作り。セメントをこねて、土台を作った。300個ものブロックを運んだのでこの日もみんな疲れきっていた。瓦の移動では、瓦を持ち上げるたびに虫がうじゃうじゃ出てきて、すごく気持ちが悪かったけど、精神的に強くなった気がする…。

ブロックの山

黒と赤のしましま毛虫が大量発生

＜教育＞

踊りを教える。この日の中心は踊りで、他には特に何もしなかった。子供たちの数は次第に増え、にぎやかな青空教室になってくる。

＜ケア＞

ケアの時間になると村人も自然と家の前に出て準備をするようになった。あるおばあちゃんは足浴をして順番を待っていてくれる。村人本人たちの意識が高まってきているのを感じる。

＜ひとこと＞

キャンプ 4 日目。日中のキャンパー同士、またキャンパーと村人とがいい関係を築き始めているのを感じる。昼休みや自由時間のときに子どもたちとバトミントンをしたり（子どもが元気すぎて本当に疲れる笑）、おばあちゃんのとうもろこしの皮むきのお手伝いをしたり・・・。ルーミンのママに毎日ひとつずつ日本語を教えることになった！ママは発音が上手！（えり）

みんな勉強熱心。授業外でも子どもたちは集まって習字の練習

このふたりは下見のときからラブラブ

8 月 14 日　キャンプ 5 日目

＜ワーク＞

・トイレ

・屋根作り（木を切る・皮をはぐ・大きな瓦を移動する）

・排水溝掘り

・この日のトイレは排水溝を埋める作業をした。そして、壁作りに突入！3列めまで進んだ。

・屋根作りのほうは、午前中に樹を切って皮をはいだ。午後から屋根用の大きな瓦を運び、この日の屋根作りは残り2箇所の屋根を残して終了した。

・午後に、排水溝を本格的に掘った。やっと掘り終えた直後、牛の大群が押し寄せてきて、せっかく掘ったところをめちゃめちゃに…アイヤー。

だんだん形になってきたトイレ！

村人のおじちゃんたちが積極的にワークに参加してくれる。一緒に汗を流す。お母さんたちはワークの合間に自家製豆腐を振舞ってくれたり、薪を持ってきてくれたり。本当にいい人たちばかり。

＜教育＞

字を書くことを教える。しかし、当然のごとく、この日の授業は中国人キャンパー主導の教室になってしまう。言語の違いを明らかに感じさせられた日であった。

＜ケア＞

あんちゃん指導の下、ケアを続ける。

＜ひとこと＞

村の子供達とはよく遊ぶ私であるが、村の大人達とはなかなか絡めずにいた。“一緒にいるだけでいいんだよ”と言われてやっと勇気が出て、ひとりで村人のそばに行くことができた。もっともっと触れ合えればいいな。（あい）

8 月 15 日　キャンプ 6 日目　Freeday、パーティー♪

今日はワークはお休み。午前中はジャーピン村からさらに山を登ったところにある少数民族のおうちに訪問。かなりハードな山登り。夜は村人もみんなでわいわいのパーティー開催！　＊この日、訪問に来た政府の役人から野菜と500元をいただいた。

＜教育＞

中国人キャンパー主導だった前日の反省をもとに、この日は折り紙を日本人キャンパー中心で教える。特にあいちゃんが大活躍。子供たちもきれいな折鶴を作ることができ、満足そうであった。

山登り休憩中のたいらん。

＜ケア＞

いつもは午前にケアを実施するが、今日は山登りのためお昼に実施。明日からセルフケア指導を始めることに決定。

犬もフリーデー（足に注目！）

＜ひとこと＞

フリぃ～で～い！！と、陽気に目覚めたまではよかった。そのあとは、見事に最凶の日。全く何が悲しくて、休みの日に1時間半も山を登るのであろうか。あの登山は、夜のパーティーまで熟睡させるためだったのか。とりあえず、それでもパーティーをめいいっぱい楽しんだ私らは、“勝ちもの（ちんさん語録より抜粋）”である。（いの）

ギターとダンス、歌（かんごーらい）を見事に披露した男衆。
結構イケメンぞろいです！

8 月 16 日　キャンプ 7 日目

＜ワーク＞

・トイレ（本格的に壁積み）
・屋根（完成！）
・薪運び（キッチンへ　子供達もお手伝い）

トイレの壁積みは7列目まで進んだ。みんな壁作りの手つきもかなり慣れて来た。村人の家の屋根作りは全て終わった。
薪運びでは、子供達が手伝う姿が見受けられた。この調子で村のおばあちゃん達の手伝いもして欲しいと思った。

＜　　教　　育　　＞

屋根完成！

「幸せなら手をたたこう」を歌詞無しで歌う。歌詞無しだと子供たちには難しいらしく、苦戦していた。

＜ケア＞

今日からセルフケア指導。消毒薬やオロナインの使用方法、包帯の巻き方など。足裏のケアを自分でするのが不可能な村人が 2 人。孫も一緒に参加しておばあちゃんに対するケアを覚えてもらう。

＜ひとこと＞

一日中トイレの壁作り（隙間埋め）をして、私に「隙間埋め職人」というあだ名がついた。村の子供から、ハンセン病が原因で、学校でいじめにあっていると言うことを聞いた。実際に起きている現実。私達はこの子達に何ができるのだろうか。この村に来てもう一週間が経とうとしている。自分にできる何かを残したい。そう思った。（香織）

8 月 17 日　キャンプ 8 日目

のぶ（FI 関西　國分伸浩）と HANDA の義足技師さんが来了！

＜ワーク＞

・トイレ（壁積み終わりあとは屋根と中）

・憩いの場作り（大きな石取り、土を挽いて平らに）

トイレの壁積み終了！共同作業で、キャンパー同士の友情も深まった。憩いの場を作るために土を運び、大きな石を取って、地面を平らにする作業を行った。

壁作り完了！！わーい！！　あいちゃん♡dajie

＜教育＞

子供たちに対して、お年寄りたちを助けるように教える。しかし、この教育は結果に結びつかなかった。他の人のためにする余裕がないらしい。明日ハンセン病について授業を行う予定。そのために本日ミーティング終了後、キャンパーはグループに別れ各家庭を訪問。

1、 子どもに対し、a 差別を受けたことがあるか

b この村についてどう思っているか

2、 親たちに対し、a ジャーピン村の子どもについて周囲の村の人はどう思っているのか

b 周囲の村の人たちはこの村をどう思っているのか

c 村の高齢者のための薪拾いなどのお手伝いについてどう思うか

d 今日の教育（おばあちゃんたちを助ける）が生かされていないことについてどう思うか

以上を基本的な質問事項とし、子どもたちを取り巻く差別の現状を中心に話をうかがった。

＜ケア＞

HANDA の義足技師さんが、今年１月に左足を切断したおじいさんに義足を装着するため来村。引き続きセルフケアを指導。セルフケアができない2人について村長にケアを依頼する。しかし、村長は忙しくて週に1回ほどしか見てあげられないという。どうするべきか。

＜ひとこと＞

差別。日本にいる中では、この言葉と正面切ってぶつかる機会など、そんなにない。というか、私にはなかった。差別のことを勉強すると、どうしても本の中の世界、つまりは自分にとって“遠いどこかのおはなし”になりがちなのだ。でも、この村では、いつでも今そこにあるもの。差別。初めて正面切って、ぶつかってしまった。（いの）

8 月 18 日　キャンプ 9 日目

＜ワーク＞

・トイレ

・憩いの場作り

この日は、トイレの屋根作りと、便器を埋めて周りをセメントで固めた。トイレに行くまでの道もセメントで固めて、みんなそれぞれに名前を残したり、顔型をつけたりした。自分達のしたことを形に残すことって嬉しい。

屋根作りの様子

トイレロードに顔型をつける2人

＜教育＞

村の子どもたちがいじめられていることを知り、子どもたちに正しい知識を持ってもらうために、ハンセン病の授業をやる。前日の home visiting の結果をもとにこの日は中国人キャンパーのロンフォイがその授業をおこなった。

＜ケア＞

セルフケア順調に進む。村人も次第にひとりで傷の手当ができるようになってきた。義足をつけたおじいちゃんも医学生 Wenwen 指導の下、徐々に歩行練習を始める。明日、CDC（皮膚病センター）よりガーゼ、包帯などの援助が受けられることになった。これこそがワークキャンプの威力。

＜ひとこと＞

先日の home visiting。なかなか笑顔を見せてくれないある兄弟のおうちに行った。お兄ちゃんは学校に行くべき年齢だが学校に行けず、ふたりともこの周辺の方言しか話せない。いまのパパは実は本当のパパじゃない。周囲の村人はこの村をとても怖がっていて、彼らが通った道を歩きたがらない。・・・こんな事実を子どもやパパ、ママの口から直接聞いた。2 人があまり笑ってくれない理由が少し分かった気がした。何年かかるか分からないけれど、周囲の村の人たちのジャーピンに対する意識が変わっていくように、私たちキャンパーがなにかアクションをおこさなければいけないと思った。そして何より、いまできることとして、残り少ないキャンプの中でこの 2 人の子どもの笑顔をなんとか引き出したい、と強く感じた。そして迎えた今日。たった一日じゃなにも変わらない。自分の無力さと今までこの村を流れてきた時間の長さがどっしり圧し掛かる。でも、CDC からの医療物資の援助、政府の訪問など、私たちのワークキャンプが今までにない何かをジャーピンにもたらしていることは事実。村人と過ごせるのもあと 2 日・・・（えり）

8 月 19 日　キャンプ 10 日目

夜は第二回目のパーティー♪

＜ワーク＞

・トイレ（完成！）

・憩いの場（セメント塗って完成）

トイレの入り口の壁を作って、完成！トイレに行くまでの道も付け足した。長い道のりで、ハードな仕事だったけど、みなお疲れ！

＜教育＞

この日は私がハンセン病の授業をおこなった。もちろん中国人キャンパーのチンさんの通訳を介してだが。伝いことを伝えることができずやはりもどかしさが残るものであった。

＜ケア＞

CDC からのガーゼ、包帯、綿棒が大量に届く。ケアもいよいよ終盤。村人にこれからの生活上での注意（ガーゼを濡らさないように、あまり歩かないように、など）を伝えながらケアを行う。

憩いの場であいちゃん休憩

＜ひとこと＞

パーティーwith 村人!!子供たちは覚えた歌・踊りを村人達にお披露目！みんな練習の成果もあって息もぴったり。村人たちと一緒にゲームしたり、と～っても楽しい時間を過ごすことができた。（あい）

8 月 20 日　キャンプ 11 日目

お昼ごはんは、トイレ作りを手伝ってくれたエンジニアの匠（勝手に命名）のおうちでおごちそうになりました。夜は最終ミーティング

＜ワーク＞

初日に整理した衣服や靴などを村人に配る。

＜教育＞

まず、手紙の書き方を教える。キャンパーたちは家の壁に自分の住所を書き、子どもからの手紙を待つ。次に、子供たちが将来の夢を発表。外の世界に憧れを持つ子供たちばかりだった。その夢がいつかかなうのを願うばかりだ。

＜ケア＞

ケア最終日。CDC からの物資やキャンパーが持参した医療品を仕分けし、村人に渡す。余ったものは村長に預ける。毎日のケアを通し

て村人のケアに対する意識を高めることができたと思う。私たちが帰ったあとも村人が意欲的に継続的にセルフケアを続けてくれることを願う。セルフケアができない 2 人の村人についてだが、隣に住むおばあちゃん（彼女自身も潰瘍を持つ）が、私が 2 人のケアをするよ、と言ってくれた。

＜ひとこと＞

みんな匠の家でお昼ご飯をご馳走になった。みんなは歩いて行ったが、イノとアンちゃんは、バイクに乗っていった。匠の家で一休みしていると…アンちゃんがすごい顔で、「イノが…！」と。事故かと思って心配していたら、イノは別の小屋に監禁（？）され、アヒル殺しを手伝わされていた（笑）あいちゃんも先に帰ったと思ったら、道を間違えて行方不明になるし、大変だった。

≪ちんさんからのメッセージ≫

「饿了。（E le.）」（お腹が減った。）この言葉は覚えましょう。（香織）

WE　LOVE　匠 ★

帰りは匠号で村まで送ってもらった♪

8 月 21 日　キャンプアウト

＜ひとこと＞

いつも通りの時間に起床。でもよく考えてみると今日でキャンプもおわり。そう考えると朝から胸がいっぱいだった。私たちキャンパーが帰ったら村人たちはどうなるのだろう。そんなことを考えながらの掃除、荷造りはなかなかはかどらず。いよいよ迎えの車が到着し、キャンプアウトとなったとき、村人はつぎつぎに集まってキャンパーひとりひとりと抱き合い、キャンパーは「再来」を誓う。毎日遊んだ子どもたちがなかなか手を離さない。おばあちゃんたちも涙を流しながら「謝謝」と言ってくれる。ずっと不安だったけれど、私たちはトイレや排水溝など形あるものだけでなく、村人の心の中に何か大事なものを残すことができたのだろうな、とこの時初めて思えた。帰りの車の中ではしばらく涙が止まらなかった。私もこの 10 日間のキャンプで、村人からたくさんのものをもらっていたのだろう。（えり）

６、個人総括

井上　祐介

【教育総括】

教育というものは、本当に大事なもの。それを一番に感じた。それまで村の子供たちは外の世界への絶望を抱いていたように、私には思える。当然かもしれないが、私たちが村についた頃にはあまり近寄ってきさえしなかった。しかし、徐々に日がたっていくにつれて、子供たちは輝きを増していったかのように感じる。それは、私たちに向かって放つ笑顔の輝きの変化であった気がする。

私にはこの笑顔の輝きの変化の理由は、教育であったように思う。それまで大切なことではあるが、単調な農作業ばかりであった毎日に、何か新しいものを習うという、新たな習慣が加わった。そして、純粋で素朴なこころの持ち主たちは必死にそのチャンスに食らいついていた。楽しむことを忘れずに。これこそが輝きの要

因ではなかろうか。

運営側の私たちとしては、教育係同士の情報交換が十分になされていなかったり、またどうしても中国人キャンパー主導になりがちであったという反省点は多々あろう。だが、子供たちに学ぶことの面白さを少しでも感じ取ってもらえることができただけでも、今回の教育は成功であったろう。

あとはあの子供たちがこれからも外の世界へ目を向け、何かしら学び続けていくことを願うばかりだ。

【感想】

衝撃と感動。このキャンプの感想は、この二語に尽きるのではないかと思う。

私自身、海外が初であり、中国に行くことだけで衝撃を覚えていた。村に行けばなおさらであり、まずその環境に慣れるのが大変であった。しかし、2、3日で慣れることができ、そこまでいけばこっちのもの。飯は多少脂っこいけどうまいし、シャワーもあるし、星はきれいやし、といった具合に満喫しまくった。

ただ一番の衝撃は、やはりその村が周りから“化け物の村”として見られていることに尽きる。日本で私は20年間ほど生活していたわけだが、そのような差別の現場というものに触れたことがなかった。日本で様々な差別の歴史などを勉強するにはした。しかし、それは本当にどこか遠い世界の話でしかなかった。この村が今、私たちが生きている世界に存在することを知ったことの衝撃はすさまじいものだった。

しかし、その衝撃を上回る感動も何度もあった。その多くは村人たちとの交流にあった。私はダニによる過敏症にかかってしまい、不本意ながら中国の田舎の病院にいくことになってしまった。この病院の文句はいろいろあるのだけれど、それを話し出すと止まらないので、また別の機会に。それで、この病院に行く際に、少し村から離れているので、村人にバイクで乗せていってもらった。そのお礼を言うと、「なになに。君たちがやっていることは、村の人たちを幸せにしてくれているんだから、別にいいんだよ。」という返事が返ってきた。この例を代表するように、村人は本当にあたたかかった。だから最後の別れは、本当にとめどない涙が流れた。

私たちは偏見の中に浸っている。それは仕方のないことかもしれない。ただ、大切なのは、きちんと自分の目で確かめてから抱いた偏見であるかどうかということである。自分で触れてみたら、“ハンセン病の村は化け物だ”や“中国人は日本人に冷たい”などと言う偏見を抱いたままでいれるのだろうか。いれるはずがない。私はそう思う。大切なのは、偏見を持たないように自分の目で見ていく努力をすることなのだ。私は、このキャンプで一番にそれを学ぶことができたと思う。

最後にこのキャンプに参加したすべての人にこう言いたい。

再見！

渕上　愛

【KP 総括】

今回、食事リーダー（KP）として、わたしはあまりよく働けなかったのであるが、全体の反省として、もっと計画的に食事に取り組むべきであった。毎日、食事を作る人を決めるということをするのではなく、キャンプする前から決めておくのも良いように思えた。また、キャンプの途中で、本当に材料が無くて困ったときがあったので、買出しに行く日はいつかを考え、ここでも計画的にすべきである。

【感想】

私は今回、初めてワークキャンプに参加した。私がこのキャンプで最も強く感じたのは、村人との絆のようなものの存在である。

私は、まったく中国語を話すことができないに等しかったが、ケアをしたり、共にインフラ整備をしたり、様々なことを共有していくことで、私は村人たちのことをとても大切に思うようになった。“家族”のように。

とても楽しい時間を過ごすことができたが、同時に色々なことを考えさせられる旅にもなった。村にいるときは感じないが、村人から聞くと露になる、ハンセン病快復村に住む人々への他の村人たちからの偏見。その中でも、違うのに自分はハンセン病だと思っている子供がいたことがショックだった。そして、教室ぐるみでいじめられるという事実もそうだ。村を一歩出ると、偏見が現在進行形であるのがとても悲しかった。やはり、ハンセン病快復村以外のところで、ハンセン病は“化け物”の病ではないことを知らせていくことは皆が思っていることだとは思うが、必要不可欠であると思う。

私のことについて言えば、これからの課題は多々あるが、最も強く後悔してやまないのは、村でもっと大人といる時間を多く持つべきであったということである。子供に対しては、一緒に遊ぶことを私はコミュニケーションをとる方法としていた。しかしその中でも、“子供とは遊ぶだけでは駄目だ。自分がただ楽しんでいるだけのように思える。”といったことを言われ、どうしていいかわからなくなったし、今でもよく分からない。大人の人たちとは、休憩時間に仕事を手伝ったりすることでしか私はほとんど一緒にいなかった気がする。同じ言語を使えず、言葉でコミュニケーションをとれないことで、ただ黙って一緒にいるということが私にはできなかったのである。そのことが自分の大きな反省点であると切実に思っている。

たくさんの人と出会ったり、色々なことを考えたり、心の底から笑ったりと、たくさんのことを一気に経験した気がする。ワークキャンプを終えてから、人との出会いはなんて素晴らしいのだろうと感じるようになったことである。行く前は、ワークキャンプは１回きりにしようと思っていたのだが、それを経験してしまった今、そんなことできるはずもない。また、ワークキャンプをしたい。

宮園　香織

【ワーク総括】

ワーク全体を通して、ワーク内容がハードだったように思う。みな昼休みには村人との交流よりも休むことに重点を置いていた。

そしてこれは全体の反省としても挙げられるが、日本側と中国側の情報が共有できていなかった。ワークを始める時も、私達はまず何から手をつけていけばいいのかわからなかった。今回のキャンプは、えり以外のメンバーが一回目のキャンプということもあって、中国のキャンパーがメインとなってワークを進めていった。次回キャンプを行う時には、下見から参加するのが一番理想だが、キャンプ前に中国側との連絡をしっかり取り合ってから、キャンプに臨みたいと思った。

フリーデイの次の日あたりから、ワークが全体的にだらけてしまっていたと思う。みな仕事はしているのだけど、働いているのか休んで

いるのかわからないような状態が続き、最終的には同じ人だけが働いている。というような光景が見られた。日本人の性格からか、やはり仕事をする人としない人が出てくると、自然に不満の声も出てきたりした。中国人はそのことについてどう思っていたのかがわからないのだが、そのときにリーダーである私がもっと全体に声を掛けたりしていればよかったと思う。キャンプは全員で作るものなので、ミーティングなどでも、ワーク内容についてもっと積極的に発言をしていれば。と思った。

【感想】

ワークキャンプに参加することができて本当によかった。男女関係無く、一人一人ができる範囲でワークに参加し、共に生活して、喜び悲しみをわかち合えたからこそ、キャンパー同士の間で絆が生まれたと思う。帰る頃には村人、キャンパーが自分の家族であるかのように思えたのだから。

私が今回の旅で（キャンプ以外で）一番印象に残ったのは、初めての長距離列車での移動。座る座席などあたりまえのようになかった。中国人は当たり前のように通路に新聞を敷いて寝そべったり、いすを持ち込んで座ったりしていた。重たいバックパックを抱えた私たちは満足に荷物を置く場所さえもなかった。私たちが中国人でないということに乗客は気がつき、ジロジロと見つめられた。しかし、時間が経ってくると、列車の中が暖かい雰囲気に包まれた。

そのきっかけは何と言ってもワゴン車だろう。列車の中にはものを売るためのワゴンが何往復も行きかっていた。ワゴンが来るたびに私たちは通路に下ろした荷物を抱えなければならなかった。そのうち座っていた中国人の一人が私たちの荷物を荷台へと持ち上げてくれたのだ。すると次々に「ここに荷物が置けるよ。」「ほらここ！」みたいな会話が飛び出し、あっという間に私たちは身軽になった。降りるときにも荷物降しを手伝ってくれたりして、本当に人間の暖かさを実感した。胸を熱くしてくれた出来事だった。

つたない会話力で中国人と話をしたが、中国人はひとつ壁を越えると仲間意識がすごいものだということがわかったし、テレビで報道されている反日感情なぞ嘘のようだった。

言葉や文化は違えども、もとは同じ生き物なのだ。やさしさの無い人間なんていない。そう思った。

キャンプで子供たちと触れ合って「ハンセン病（麻風病）」という名詞の現実に突きあたった感じがした。日本を発つ時も、ハンセン病という言葉を聞くと、知り合いはみな顔をしかめた。私もその一人だったのかもしれない。
パソコンで見た傷の画像、友達から聞いたわずかな情報。それだけで自分のなかのハンセン病のイメージは固定されたものだった。

実際に村に行って村の人が受けてきた（受けている）現状を知った。子供たちが自分たちもハンセン病だと思い込んでいるということを聞いてショックだった。いじめを受けている子もいた。私たちが１０日間で形として残せたものは多々あるが、肝心なものは村人の心に何が残せたかだと思う。

私たちが１０日間甲坪村で共に過ごしたことで村人や、周りの村の人たちがハンセン病への考えを違った角度で見つめなおしてくれたらいいなと思う。
今甲坪村のみんなは何をしているんだろう。日本で何度もそう思い返す。

本当に一言で言い表らわせないくらいの経験ができたワークキャンプに多くの人に参加して欲しいと思った。私自身、日常生活では得ることの無いたくさんの刺激にであうことができた。機会と時間に恵まれたならぜひもう一度参加したいと思う。

渡辺　恵利

【ケア総括】

前回のピンシャン村でのキャンプから、FIWC 九州と桂林キャンパーはキャンプに医療ケアをとりいれるようになった。スキルを私たちに教えてくれるのは、我らがあんちゃんこと小牧義美氏とたいらん（原田僚太郎氏）である。今回のジャーピン村でケアをするにあたり、自分なりに目標を3点掲げていた。ひとつめは、継続。ケアをワークの中の一部として、毎日建設ワークを行うのと並行して実施することである。彼らは主に足底に潰瘍や創傷を抱えているのだが、生活するためには歩かなくてはならない。そのたびに足は汚れ、浸出液が包帯やガーゼに付着してハエがたかる。足浴をすることと、できる限りの清潔を保つこと、そしてそれらを毎日行うという習慣を彼らに身に着けてほしかったからである。ケアは毎日午前中にキャンパー4人で行った。私たちキャンパーが、毎日継続するという意識付けを強く持っていたからか、日が経つにつれ、村人自身にも変化が見られた。私たちがケアをする時間になると、仕事を中断し、各自で汚れを洗い流して待っていてくれるようになった。大きな変化だった。ふたつめは、セルフケアの実施。たった10日間のキャンプ、そのなかで私たちが継続的にケアを施して予後が良くなったとしても、私たちがキャンプアウトしてから何も行われないのでは意味が無い。その例として、昨年のピンシャン村、私たちキャンパーが村を去ってからも、あんちゃんはひとり村に残り、村人のケアに尽力した。半年後、私たちは自分の目を疑った。目を背けたくなるようなピンシャンの村人たちの傷が快方に向かっていた。継続的に、根気強くケアをすることの大切さを感じた。しかし、今回はあんちゃんが村に残ると言うわけではない。村人に自分で自分のケアを行ってもらう必要性があった。セルフケアの指導はキャンプ後半になってから行った。薬の使い方、包帯の巻き方、個々人によってケアは異なるけれども、それぞれが自分なりのケアを確立していったように感じられた。セルフケアが必要な村人6人のうち、2人は老衰や身体の不具合のため、自分自身でケアをすることができなかったが、自分自身も足底に傷を持つ老婆が、私が彼ら2人にもケアをするよ、と言ってくれた。嬉しかった。3つ目は、ケアキャンプを伝えていくこと。キャンプのなかケアをするのが初めて、それどころかキャンプに参加するのが初めてというキャンパーが多かった今回、ケアをキャンパーの中に浸透させたかった。キャンプ中にキャンパー全員がケアを経験し、村人が抱えるハンセン病後遺症と向き合うことができた。治療をしながら、家族構成や、この村に来た経緯、などたくさんのことを村人と話す。ケアをすることで、ケアをしながらの時間を村人と過ごすことで、彼らの生活や人生が見える気がしたのはきっと私だけではなかったと思う。言葉が通じない日本人キャンパーは特に、ケアを経験してからというもの、治療が必要な年老いた村人と素直に触れ合えるようになった、と言ってくれた。ただ治療をするだけではないケアの側面を各々が感じ取ってくれたのではないかと思う。

今回強く思ったのは、村人の生活の中にいかにケアを取り入れるか、ということだった。足底に傷があるから、悪化を防ぐために歩くな、と村人に言うことはできない。彼らは生きるために重いかごを担ぎ山にとうもろこしを取りに行き、神経痛が病まないそのか細い腕で、それらの皮をむき実を乾燥させなければならない。治療をすることよりも、生きるために優先すべきことが彼らにはたくさんあった。村人のそんな現実と対峙すると、治療に専念して、とは絶対に言えない。生活の中にいかにケアを浸透させるかを模索すべきではないかと強く感

じた。彼らの生活や言動などからデータを集め、アセスメント、診断、計画立案、実施、評価という看護の基本に沿ったケアを、村人ひとりひとりに展開していくという意識を下見のときから強くもっていれば、もっと村人それぞれに丁寧なケアができてのではいかと考える。

【感想】

また、キャンプに魅せられた。本当にそう思う。正直なところを言うと、今回のキャンプで中国は少しお休みにしようかと考えていた。いろんな国をもっと訪れたい、また、日本の中でも自分の知らないところがまだまだあるはずだ、などとその理由を挙げるときりがないが、FI九州からの中国キャンプを率いてくれる後釜づくりも私にとって今回の大きな目的であった。

今年3月に下見を実施、それから半年間準備をしてきた。中国側との連絡不足、メンバー不足など、General leader として反省すべき点は数知れない。果たしてキャンプは成功するのだろうかと、不安に思う要因は多かった。一方で、私以外の、いの、香織、愛はキャンプに参加するのは初めてであり、私が初めてキャンプに参加したときのようなあの感動や快復村の現実、それらに向き合わせてくれたキャンプの素晴らしさを彼らにも体全体で感じてほしい、そう感じてもらえるようなキャンプをつくってやるぞ、という希望と意気込みもあった。

いろんな感情を抱え、半年振りのジャーピン村へと向か

たが、ここの村人が本当に好きになった。そして今回、10

あんなに小さい子どもがいる村に訪れるのも、ケアにこ

初めてだった。「初めて」を経験することで発見したこと、

またツナガリがひとつ増えた。いままでのツナガリが深

7、全体総括

全体としての反省点→改善方法

キャンプ準備期間

・中国側、日本側ともに、下見を行ったキャンパーのうち数名しか本キャンプに参加していないため計画を立てにくかった→下見に行ったキャンパーは必ず本キャンプも参加！

・中・日・独の連絡不足のため、ワーク決定、予算決定がかなり遅れた→保持朕系！

・日中ともに資金面に苦労した→キャンプまでの資金工面に工夫が必要。積み立てやフリマなど

キャンプ中

・病人が多かった→自己管理をしっかり、ワークの量とキャンパーの人数につりあいを持たせる

・全体としての救急箱がない→忘れず準備、常備薬は個人で

・やはり、中国人主体となってしまう→しっかり主張、下見・計画の時点から日本側も意見し、キャンプのビジョンを一緒に立てる、言語習得（特に英語、できれば中国語も）、日本人キャンパーがお客様キャンパーにならないように！

・最終ミーティングの日にち→今回はキャンプ最終日にミーティングを行ったが、できればキャンプアウトしてからするのがよいのでは？最終日に行うのでは、村を出てからの感情、感想、反省点などあがってこない

2007 年春、夏のビジョン

・2005 年からのパートナーである桂林委員会とひきつづきキャンプを行う。

今後は桂林ピンシャン村、ジャーピン村でのワークキャンプ続行、または貴州省へ進出

・2007 年春　ピンシャン、ジャーピンでのミニキャンプ、2007年夏のキャンプサイトへ下見予定

・2007 年夏　本キャンプ実施予定

完成したトイレの前で

8、会計報告

	内訳	支出	残高
収入	1万円×4	→ 2672元	2672元
両替手数料		40元	2632 元

広州～桂林　バス代	160元×4	640元	1992　元
村費（村での生活費）	262元×4	1048元	944　元
パン代　（朝食）		8．8元	935．2元
TAXI代		360元	575．2元
ホテル代		330元	**245．2元**

＊これとは別に、FIWC 九州中国キャンプから 3 万円をキャンプを開くにあたってキャンパーが必要な日用品を購入する費用として支払う

＊4 万円の収入は井上、渕上、宮園、渡辺からひとり 1 万円ずつ

＊航空券、海外保険費は渡航前に支払い済み

＊上記以外の交通費は各自支払い

９、連絡先

我々FIWC　九州委員会の活動に興味をもたれた方は、ぜひ、下記のホームページをご覧になってご一報ください。中国キャンプのほかに、フィリピンキャンプ、国内活動などを行っています。熱く愉快なメンバーが皆さんをお待ちしています。

Friends International Work Camp　九州委員会

HP: http://fiwcq.fc2web.com/

mail: fiwcq@hotmail.com

中国キャンプ担当　渡辺恵利　09075790280